

まんまる通信



(第3号) <言語環境について>

宮城県立視覚支援学校
相談支援センター
早期教育相談「まんまる相談室」

木々の葉っぱの新緑がきれいな季節になりました。県内のコロナ自粛は少しずつ縮小されてきましたが、子どもたちを取り巻く環境はまだまだ制約が大きい毎日です。もうしばらくご家庭で過ごすことが続く可能性があります。こんなときだからこそ、今一度「言語環境」について一緒に考える機会にしたいと思います。



<見えにくい・見えない子どもたちの特徴>

視覚障害のある乳幼児は、「見えない」「見えにくい」ため、まねっこが苦手です。同じ空間にいる人が自分と同じように、ある対象に対して注意を向けているということを知ることができません。例えば、家族が隣で同じ部屋でテレビを見て笑っていても、何を見ているのかわからない。どうして笑っているのかわからないのです。そのため、人との共感する気持ちの育ちが難しかったり、模倣ができないなど、見えにくさゆえの特性があります。また、相手の表情を読んで状況の判断することができないため、認知面や言葉、社会性の発達への影響が大きい障害とも言われています。自分自身の行動についても、正解なのか間違っているのかを確認することができません。

<じゃあ、どうしたら良いのかな？>

乳幼児と一緒に生活する中で、子どもの動きをつぶさに観察して応答したり、子どもの行動を丁寧に言葉におこして伝えたりしていくことで、完全ではなくても、視覚情報を補うことができます。「触る」「聞く」「嗅ぐ」「感じる」などの生活経験を通して、具体的な事や物、生活上自然に行っている動作と言葉を結びつけ、正しいものの理解につなげていくことはとても大切なことです。「上手に座れたね。」「上手に握れたね。」など、具体的に伝えていきましょう。生活経験の浅い子どもは、上手にできなくて当たり前です。できないことを指摘するより、できたことをほめ、認めていく姿勢がとても大切です。子どもの様子に合わせてじっくり待たなくてはいけない場面も出てくるので、親にとっても根気が必要ですが、子どもの「自分でできた！」の気持ちを育む手立てとして、とても有効です。無理のない範囲で、心がけてみてください。親も忙しい毎日の生活があるので、くれぐれも無理は禁物です。「できるときだけやってみる。」この意識もまた大切です。細く長く取り組むことが何より大事なことです。

また「今の上手だったね。」「そのにっこり笑顔、とってもステキよ。」など、どんなに小さなことでも、親が思っていることを、肯定的に丁寧に言葉で伝えてあげてください。子ども自身が、長い人生、自分に対して自信をもって生きていく下地を小さいことから育てていけるといいですね。



<配慮するところ>

様々なことを「体験させる」ことをメインに考えるあまり、「無理やり触らせる」ことにならないことです。周りの大人が必死になるあまり、子どもの気持ちも考えず、大人中心の活動にならないよう、気を付けましょう。子ども自身の「何だろう?」「何でだろう?」「何の音?」「触ってみたい!」の気持ちを育てるよう、子どものやる気に働きかけるように、子ども自ら手が出るような言葉掛けを日常生活の中でも心掛けてみてください。生活習慣を変えるのは難しいことですが、意識することはできるかもしれない。毎日の生活の中でずっとやり続けることはできなくても、場面ごとにちょっと意識するだけで、子どもに対する言葉掛けが変わってくるかもしれません。毎日触れる言葉だからこそ、コロナの影響で巣ごもり自粛が望ましい今だからこそ、見えない・見えにくい子どもにとっての言語環境を、今一度考えてみる機会にしてみても、どうでしょうか? ご家庭の中での、話題にしてみてくださいね。

● 次回は、乳幼児の運動・動作の発達について一緒に考える機会にしたいと思います。



お知らせ

6月8日(月)に予定していた乳幼児教室「ミニゆうゆう広場」は新型コロナウイルス感染症の感染予防に必要な三密の状態を回避できないことから、中止とします。再開の運びになりましたら、改めてメール等でお知らせします。お忙しい中、日程調整等大変ご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

